

ねりま小中一貫教育レポート

〇●〇 第 13 号 〇●〇

平成 25 年 2 月

発行：教育企画課・教育指導課

1 月 17・18 日、「小中一貫教育全国連絡協議会」が主催する第 7 回小中一貫教育全国サミットが京都市で開催されました。今回のサミットでは 15 の自治体による研究発表がありました。

練馬区では小中一貫教育校および研究グループから 12 名の先生方が参加しました。参加された先生方からの報告をもとに全国サミットの様子をお知らせします。

◆施設一体型小中一貫校「京都大原学院」における公開授業（1 月 17 日）

○5・8 年の交流授業「算数・数学」では、5 年生が前に、8 年生が後ろに座り、5 年生が後ろをむくと話し合いができる環境づくりをしていた。5 年生の内容を 8 年生が助言したり、8 年生の内容を 5 年生と一緒に考える場面があり、8 年生には復習となり、5 年生には数学への関心や意欲を高めることにつながる、と感じた。



○6・7 年の交流授業「特別活動」は、先生を市長役にして、市長の提案に対して議員役の児童・生徒が賛成・反対の判断を行い、その理由を述べて議論をする内容だった。よりよい考えに持って行く意見が多数あり、おもしろい授業設定だった。

◆施設一体型小中一貫校「東山開晴館」におけるパネルディスカッション



○小中一貫校は地域に対して、小学 1 年から中学 3 年まで、つまり 15 歳までの学力に責任をもつ、というメッセージをきちんとアピールしていかなければならない。

○学校事務職員が年間予定を把握しているので、小中共通のカレンダーを学校事務職員が作成する

など、教職員全体で関わることが小中一貫教育の成功に大きく貢献する、という話があった。これまで考えたことがなかったので驚いた。

○小中一貫の取組は多様な内容や方法があってよいが、交流メインよりも、カリキュラムや指導方法を一貫して日常的に行っていくことが大切であり、長く続けていくことができる。

○乗り入れ授業がイベントになってはダメ。どういう意図から、その乗り入れ授業の必要性があったのかを検証しながら進める必要がある。

◆施設一体型小中一貫校「東山開晴館」の公開授業

○スパイラルタイムとして、毎日15分間、読み・書き・計算を行うモジュール学習（反復学習）の時間を設定している。カスタネットのリズムを取りながら詩を群読したり、電子黒板で残り時間を掲示して100マス計算を行ったりしていた。

○算数では全学年「見通し」「考え方」の場面で、児童司会による話し合いがあった。4年以上では、事前に決めた台本を使って上手に話し合いができていた。

◆5つの分科会

(1)特色あるカリキュラムの編成や指導法の開発 講師：兵庫教育大学 加藤教授

○小中での時程設定の工夫や、家庭学習の目安の一覧、9年間共通した授業スタイルなど具体的な手立ての紹介があり、大変参考になった。

○①教師TT型の交換授業 ②教師GT（ゲストティーチャー）型の交換授業 ③小学生と中学生の合同授業 ④生徒GT型の合同授業 という4分類は、施設分離型で連携を進めていく学校のファーストステップを考える際の指針になるものであると思う。是非参考にしたい。

○講師から、小中一貫教育でどのような力がついたのか、検証する手立てや時期を計画に入れるべきである、その指導法・手法が子供たちの学力を伸ばすためにどれだけ役に立ったのか、という視点で評価しなくてはいけない、という助言があった。

(2)家庭・地域と連携協働した取組 講師：兵庫教育大学 堀内教授

○水戸市立国田小・中学校では、地域の方をゲストティーチャーとして多用し、地域と連携した9年一貫教育校となっている。地域行事にも積極的に参加し、学校・地域の双方向の協力関係を築いている。

○松江市では、「よこの一貫（環）教育」として「小中一貫教育地域推進協議会」を設け、「学校支援地域コーディネーター」を配置して、あいさつ運動や駅の清掃などで、地域ぐるみで子供たちを育成する環境づくりを進めている。

(3)実施形態に応じた小中一貫教育の方策Ⅰ（連携型・分離型）

講師：千葉大学 天笠教授

- 南陽市赤湯小・中学校では、中学1年の道徳授業を、元小学6年担任が乗り入れ授業で行い、子どもの様子を見比べて、その後の指導に役立てた。
- 呉市阿賀野小・中学校では、「日本一礼節のある学校」をめざし、中学校では校門の前で一礼して学校へ入る、中学校生徒会が小学生へ礼の仕方を教えるなどの取組を徹底してきた。先輩から後輩へ教えることで定着が進み、学校が落ち着き、地域の人から褒められるようになった。
- 宗像市城山中学校区では、基本的な授業スタイルを明確にし、ハンドブックを発行して全職員に周知した。小小が連携して授業スタイルをそろえ、そのスタイルを中学校でも行うことで、滑らかな接続ができるようになった。
- 小・中間のネットワークが形成されれば、さまざまな取組が可能になる。教職員全体で関わっていく姿勢が大事であると感じた。

(4)実施形態に応じた小中一貫教育の方策Ⅱ（施設一体型）

講師：京都産業大学 西川教授

- 京都市、奈良市、広島県府中市から発表があった。練馬区の小中一貫教育校の実践とも重なるところが多々あり、参考となるとともに自信を深めることができた。

(5)教育委員会と学校の連携の在り方

講師：玉川大学 小松教授

- 宇都宮市では、小中一貫教育を実施するための小・中学校の組合せを「地域学校園」（練馬区の「学習指導型連携グループ」にあたるもの。通学区域とは異なる）として設定し、平成24年度から全市で小中一貫教育を進めている。教育委員会では、「小中一貫教育と地域学校園 手引書」を作成して全教職員に配布した。
※手引書は宇都宮市のホームページに掲載されています。
- 八潮市では、教職員ジョイント研修会（異校種体験研修）や合同研修会（夏季休業中に中学ブロックごとに実施）などを通して、「できることから実践」してきた。取組を通して、今まで「できない」と思っていた教職員等の意識が「やればできる」に変わり、さらに「なにかできることはないか」と考えるようになった。

◆平成25年度の小中一貫教育全国サミット

25年11月21日（木）・22日（金）につくば市で開催されます。

25・26年度小中一貫教育研究グループなどの先生方に参加していただく予定です。